

老人は親切に一同を働つて、自分の乗つて来た小舟へ順々に移し乗せた。お末はお俊の手を曳いて乗つた。お房も乗つた。ほかに四人の女が乗込むと、七兵衛といふ老人は自分で櫂を把つて漕ぎ出した。不運な女七人は斯うして海賊の手を逃れた。

「これから先、どうなることか。」

お末の胸には云ひ知れない不安がまだ一ぱいに満ちてゐたが、老人の云ふ通り、兎も角も陸へあがれば又何うにかならうと果敢ないことを頼みにして彼女は努めて氣を落付けてゐた。ほかの四人の女達はお末よりも先に海賊船に積み込まれて、今まで何んな苦惱を重ねてゐたのか、いづれも氣拔のしたやうな人間ばかりで、唯ぼんやりと黙つてゐた。

小舟はやがて岸へ着いたが、陸の上も矢はり眞暗であつた。

「おうい。」と、老人が大きい聲で呼ぶと、暗い中で返事が聞えた、二三人の男が何處からか駈けて来た。彼等の持つて来てくれた藁草履を穿いて、女たちは皆な沙地

へ這ひあがつたが、何しろ船では食物を宛がつて呉れなかつたので、飢と疲労とで誰も彼も自由に歩くことが出来なかつた。お俊はそこに倒れてしまつた。

「誰か負つてやれ。」と、老人が云つた。

「いえ、わたしが負ひます。」

過日で懲りてゐるので、お末は滅多にお嬢様を人手に渡すまいと思つた。彼女はお俊を負つて、お房の手を引いて、覺束ない足取で皆なの後に附いて行つた。暗い浪打際を五六町も辿つて、それから又左に折れると、人家の黒い影が疎らに見え出したが夜はもう更けてゐるらしい、ごこの家でも戸を闔め切つて、灯の影一つ洩れてゐなかつた。老人の照してゆく小さい提灯の光を頼りにして、皆なは啞のやうに黙つて歩いた。

その中に、茅葺屋根の大きい門の前に行き着くと、二三人の男は駈けぬけて先に入つた。

「さあ、こゝが私の家だ。こゝまで来ればもう大丈夫。今夜はゆる〜と手足を伸ばして休むが可い。」

(11)

七兵衛老人の家はなか〜廣さうで、家の周囲には大きい畑があるらしかった。こゝらの大百姓でもあらうかとお末は想像してゐる中に、七人は奥へ導かれて、廣〜一間へ通された。

「くゞくも云ふやうだが、これでお前さん達も命拾ひをしたと云ふものだ。まあ、まあ、めでたい。」と、老人は笑ましげに云つた。「色々話したいこともある。訊きたいこともあるが、何しろ皆なも疲れてゐるだらうから、今夜はすぐに寝なざるが可からう。それから嘔ぞ腹が空いてゐるらしいが、一度に澤山喫べては悪いから、今

夜は粥にします。」

やがて風呂が沸いたと報せて来たので、女達は代る〜と案内された。風呂場は可なり大きく出来てゐて、女中らしい女が楊枝と鹽とを各自に渡してくれた。風呂を濟ませて歸つて来ると鹽を入れた白粥が出た、そのほかに生玉子を一個づゝ啜らせて呉れた。斯うなると、身體の疲労と氣疲とが一度に出て、皆なはそろ〜居睡を始めた。お俊はお末の膝に依りかゝつて他愛なく睡つてしまつた。

「さあ、お寝みなさい。」

女中が蒲團を敷いてくれるのを待兼ねて、七人の女は寢床に轉げ込んだ。お末も既う何を考へる氣力もなかつた。彼女も枕に就くと、すぐにすやく〜と寢入つてしまつた。夜が明けると老人が又出て来て、ゆうべと同じやうに皆なを慰めてくれた。「そこで唯一つ、お前さん達に云ひ聞かして置くことは他でもない。あの海賊どもは悪い奴等で、陸の上にも方々に同類が忍んでゐて、此地の女小兒を引攫つて船に

積み込み、又彼地の女小兒を引摺つて来て此地へ送り付ける。さう云ふ奴等だから一旦は私に賣り渡した人間でも隙を見て又拐引して行くなど云ふことは珍しくない。現に私もその手を二三度食つてゐるから。お前さん達もその積りで、當分はうかくと外へ出てはならない。好い時分を見計つて、わたしがそれぐに生れ故郷へ送つてあげるから、先づそれまでは窮屈でもこゝに辛抱してゐなさい。それにしてもお前さん達の身の上を一通りは聞いて置かなければならないから、一人づゝ私の居間へ来てください。」

老人は四人の女を代るぐに自分の居間へ呼んで、その身分や故郷などを聞き出した。お末はお房とお俊と三人連で一緒に呼ばれた。老人はお末から詳しい話を聞いて首肯いた。

「はい、判りました。さうすると、お前さん達の御主人や親御さんは屹と大阪にゐるに相違あるまい。幸ひこゝからは大阪通ひの便船も出ることであるから、私

が正直な船頭を頼んで送らせてあげます。船の出るまで氣長に逗留してゐなさが可い。」

「どうぞ宜しくお願ひ申します。」

お末はくれぐれも頼んで、自分達のゐる座敷へ戻つて来た。ほかの女達は皆なお末よりも年上で、もう十九か二十歳位であるらしいが、どの人も餘ほど疲れ切つてゐると見えて、晝間でも皆なうとくと居睡ばかりしてゐたので、お末の話相手になりさうな者は一人もなかつた。晝飯を運んで来た女中に訊くと、こゝは紀州の熊野浦に近いところで、主人は百姓のほか土地の産物の商賣もしてゐる。土藏は五戸前もあるほどの大身代で、お内儀さんも娘もある。奉公人は男女を併せて三十人ほども使つてゐることであつた。そんな話を聞かされて、お末も少し安心した。それほどの大身代の主人が悪人でもあるまい。又それほどの大身代ならば、自分達七人を養つて置いて左のみ差支へはあるまい。斯う思ふと、お末も張詰めた氣

が弛んで、だん／＼に薄く眠くなつて来た。彼女もその午過ぎの半日を居睡に暮してしまつた。それから二日ほど経つと、女中達が来て七人の髪を結つてくれた。新しい單衣に着換へさせてくれた。さうして、天氣が好いから庭へでも少し出て見ろと云つた。

氣分が追々回復するに連れて、皆なも外が戀しくなつて、思ひ／＼に庭に出た。庭から畑の方へ廻つてゆくと、主人の老人が青葉のかげから出て来た。

「日向はもう暑い。めい／＼に手拭を被つたら可いだらう。」

老人は懷中から七本の手拭を出した。五月の初旬の晴れた日で、白晝の日の強い光が眩しいので、七人は喜んでその手拭を貰つて、めいめいの顔を包んだ。手拭は白地もあれば藍もあつて、その模様も七本ながら皆な違つてゐた。

一晌ほども遊び歩いて、女達は自分の座敷へ戻つた、お末はお俊の手を曳いて、一足おくれて歸つて来た。歸る時に不圖見かへると老人の出て来た青葉の木立の蔭

にまだ二人ほどの男が立つてゐて、此方を覗いてゐるらしかつたが大方それは此家の奉公人どもであらうと、お末は別に氣にも留めなかつた。

あくる朝になると、四人の女の中で、お染と云ふ二十歳の女と、お仙といふ十九の女とが見えなくなつた。お末は不思議に思つて女中に訊くと、あの二人は迎への人に来て今朝早く出發したとの事であつた。

「まあ、いつの間に發つたのだらう。」と、取殘された二人の女は呆れたやうに云つた。

それを聞いて、一種の不安がお末の胸に湧いた。いかに出發を急いだにもしろ、今まで斯うして一緒に暮してゐた自分達に一言の挨拶も無しに發つといふのは、あまりに義理を知らない仕方であると思はれた。併し女中の説明によると、彼の二人は暇乞ひをするために皆なを一應呼び起したのであるが、どの人も熟睡してゐて何うしても起きなかつたのであると云ふ。取殘された二人はそれで得心したらしかつ

だが、お末は何うもそれが腑に落ちなかつた。

「あの手拭が何うも可怪い。」

彼女は賢しくも思ひ附いた。老人が昨日の晝間、自分達に違つた手拭を被らせたのは、何かの目標であつたかも知れない。木のかげに窺つた男達はその手拭を目標にして、お染とお仙とを擇び出したのかも知れない。さうして、夜の中に何處へか連出して行つたのかも知れない。四人の中ではお染とお仙とが比較的容貌の好かつたことを思ひ合せて、お末の疑惑はいよいよ深くなつた。

「この主人も矢張り油断がならない。」

自分達を救つたの、買ひ取つたのと親切らしく云つてゐるけれども、或はこの老人も海賊の同類かも知れない。若し然うならば、こゝにうか〜と長居は出来ない。彼女は一刻も早くこゝを逃げ出さなければならぬと思つた。併し彼女は一錢の用意もなかつた。衣類も身ぐるみ剥がれてしまつて、肌に着けてゐるものは昨日

着換へさせて貰つた單衣一枚である。この姿でお嬢様二人を連れて、何を的に何處へゆくことが出来るであらうかとそれを思ふと彼女も亦躊躇した。ほかの二人にも相談しようかと思つたが、何處に誰が隠れてゐて自分達の舉動を監視してゐるかも知れない、うつかりしたことを口外して、却つて禍を求めてはならないと、お末は何事も自分一人の胸に秘めて、油断なく其後の様子を窺つてゐる中に、夏の長い日も暮れかゝつた。

ほかの二人が風呂へ行つた隙を見て、お末はお房に囁いた。

「お嬢様。こゝの家にも既う居られません。お氣をお注げ遊ばせよ。」

「何故。」と、お房は細い眉を寄せた。

「こゝの主人も海賊の仲間ではないかと思はれます。こんな立派な生計をしてゐても油断がなりません。あのお染とお仙といふ二人は、どこかへ賣られて行つたのではあるまいかと思はれます。」

「まあ。」

お房はすぐに涙ぐんだ。

「もう少し様子を見とどけて、いよく然うらしいと思ひましたら、こゝを逃げ出すより他はございませぬ。この通り、着のみ着のまゝで路用も何にもございませぬから、お嬢様もわたくしも乞食になつて……。」

「乞食になつて……。」と、お房の眼からは涙がほろ／＼と流れ出した。

武家の娘や家來が乞食になつてさまよひ歩く、勿論それは耻しいことに相違ない情ないことに相違ない。併し今はそんなことを云つてゐる場合でない。海賊どもの餌となつて、おそろしい人買の手にでも賣渡されたら、乞食にも優る艱難や耻辱を受けないとも限らない。それよりも寧ろ思ひ切つて、主従三人が乞食に身を落して人の情に縋つて大阪まで辿つて行く方が可い。たとひ阿父様や阿母様の居所がすぐに知れないでも、大阪の藏屋敷へたづねて行けば屹と何かの手がかりを見付けるに

相違ないと、お末は低聲でお房に説いて聞かせた。

お房もお俊も泣きながら承知した。お末も泣いた。自分一人ならば兎もあれ、お嬢様二人を乞食にして連れてゆくのは餘りに痛々しいとは思ひながらも、差當つては能い智慧も工夫もないので、彼女は眼を拭きながら勵ますやうに云つた。

「決して御心配なさいませぬ。こゝから大阪までは僅の路程だと聞いて居りますから、ほんの四五日の御辛抱でございませぬ。」

「四五日で行かれるのかえ。」と、お俊は不安らしく訊いた。

「左様でございます。唯つた四五日。どうぞ御辛抱下さいまし。」

四五日で済むか、十日も懸るか、お末も實は知らないのであるが、差當りこんな氣休めを云つて、幼い主人を宥めて置くより他はなかつた。

「そんならもう寧ろ早く行きたい。」と、お房は云つた。

お末も考へた。もう少し様子を見とどけてからとも思つたが、今夜にも何んなこ

とが出来するか判らない。斯う思ひ立つた以上、一刻も早くこゝを立退いた方が安全であらうとも思つたので、彼女はお房とお俊とに囁いて、風呂場から竊と逃げ出すことに決めた。

ほかの二人が歸つて來たので、入代つて此方の三人が風呂場へ行つた。日はもう暮れ切つて低い空には弱い星が二つ三つ瞬いてゐた。

其二 輕業師

(一)

「お嬢様。こゝまで參ればもう大丈夫でございます。」と、お末は後先を振り返りなが

ら囁いた。それは、彼女がお房とお俊とを連れて、七兵衛老人の家から抜け出して、およそ一晌ほど歩きつづけた後であつた。三人は風呂場の横手の生垣の隙間から這ひ出して、方角も知らない宵闇の路を無茶苦茶に駆け抜けたのである。

それでもお末は賢しかつた。彼女は路傍に落ちてゐた藁繩を拾つて、自分がその端を掴んで先に立つた。お房はまん中を掴んだ、お俊は端を掴んで後から歩いた。斯うして行けば、暗や路でも相互に失れる心配はないので、三人はその繩をしつかり掴んで、呼吸のつゞきだけ駆け通した、少くも一里以上は駆けたと思ふ頃に、お房もお俊も疲れてしまつた。取分けてまだ十一のお俊はもう足が萎えて駆け通せなくなつたので、三人は倒れるやうに路傍に座つてしまつた。

「もう大丈夫でございます。御安心なさいまし。」と、お末は力を付けるやうに再び云つた。「こゝまで來れば、もう誰も追付く心配ひはございません。」

二人の娘は餘ほど疲れたと見えて、碌々に返事も出来ないらしかつた。それも無

理はない、彼等はまだ夕飯も喰はないで、孱弱い娘の足で一息に一里餘りも駆けつゞけたのであるから、腹が空く、足は疲れる、呼吸は切れる、もう半分は死んだやうになつて其處に座つてしまつたのである。お末も無論に疲れてゐた。併しこゝらで何時までもぐづぐづしてゐるのは不安心であるばかりか、夜の更けない中にもう少し歩かなければならないと思つたので、彼女は弱つてゐる二人の娘を勵ますやうに又云つた。

「お嬢様、さぞお疲れでもございませうが、夜の更けない中に里へ出て、何處かに泊めて貰はなければなりませんから、もう少し辛抱して御歩きください。それに空模様も何だか危くなつてまゐりましたから。」

見あげる大空はいつの間にか眞黒に陰つて、星の光は一つも見えなくなつた。舊曆の五月初旬で、もう五月雨に近い頃であつたから、天氣模様が定まらない、何時降り出して来るかも知れないと危まれるので、お末はそれをも懸念した。成べく人

の眼を避けるために、三人は人家の見えない方角を擇んで駆け出したので、右にも左にも人家らしいものは見えなかつた。一方は小高い丘に劃られて、一方には疎な森の影が黒くつゞいてゐた。斯ういふところに何時までもさまよつてゐて。夜が更けて来る、雨が降つて来ると云ふのでは、いよゝ難儀に難儀を重ねるばかりであるから、お末は一刻も早く人家のある方角へ出たいと思つた。

お房もお俊も彼女に勵まされて起ち上つた、三人は再び繩の端と真中とを掴んで歩き出したが、もう今までのやうに駈けることは出来ないで、彼等は足を引摺りながらとぼとぼと辿つて行つた。

「阿父様や阿母様は何うなされたであらう。屹と大阪においでなさるか知ら。」と、お房は覺束ないやうに云つた。

それはお末にも判らなかつた。自分達三人が海賊船に積み込まれてから、御主人夫婦は何ういふ運命に陥つたか、それが過日から彼女の胸を一杯に塞いでゐる不安

であつた。海賊どもは自分達を拐引した上に、金や荷物を奪ひ取るために御主人夫婦にどんな危害を加へたかも知れない、自分達が数々の難儀を凌いで、無事に大阪まで辿り着いたとしても、果して御主人夫婦の恙ない顔を見られるやら何うやら、それも確實には判らないのである。併しこゝで迂濶にそんな心細いことを云つては年の行かない娘達がどんなに力を落すかも知れないと危まれるので、彼女は努めて平氣を粧つてゐた。

「それはもう屹と大阪にゐらつしやるに相違ございません。奥様お一人では無し、旦那様が附てゐらつしやるのでございますから、無事に大阪にお着きなすつて、あなた方の御ゆくへを探してゐらつしやるに決つて居ります。それですから一日も早く彼地へまゐつて御両親様に御安心させて上げなければなりません。」

さう云てゐる中に、冷い雫が三人の頬にほろ／＼と落ちて來た。さう／＼降つて來たかと思ふと、お末の心はいよ／＼焦燥たれた。彼女は繩の先を掴んで強く曳き

ながら、當途も無い夜路を急いで行くと、若葉の暗い蔭もだん／＼に薄くなつて、森も大方行き盡したかと思ふ頃に小さい火の光が宙にふら／＼と浮いてゐるのが見え

えた。

「狐ぢやないか。」と、お房は繩の中程を掴んだまゝで立竦んでしまつた。お俊は慄えたやうに姉の腰に取纏つた。

「いえ、狐火ではございません。」と、お末はその火を透して云つた「狐の火ならばもつと青い筈でございます。まあ、落付いて徐かにいらつしやいませ。」

三人はぬき足をしながら忍んでゆくと、その火のあたりで人の話聲が聞えたので三人はほつとした。こゝで路行く人に、出逢つたのは僥倖である。呼び止めて里のある方角を訊かうと思つたので、お末は足を早めて火の影を追つて行つた。だんだん近寄るに連れて、それが三人連の旅人で、一人の男が提灯の火を高く振照してゐるのであることが判つた。お末はうしろから聲をかけた。

「あの、鳥渡うかどひたうございます。」

呼び止められて三人は立停まつた。男は提灯を此方へ差付けて、若い女達の姿を照して視た。

「はい。何ぞ御用ですか。」

「これから里のある方へは何う参ります。」

「里のある方へ……。一體お前さん達は何方へ行きなされるんだ。」

「大阪の方へ……。」

「大阪へ……。」と、男は再び三人の姿をじろく見廻した。新しくはあるが、袴丈の揃はない單衣を着て、細い帯を締めてゐる三人の姿が彼の眼に、異様に映つた。しく見えた。彼は少し考へながら斯う云つた。

「大阪まで行くんぢや中々大變だ。實は私達も路に迷つて困つてゐるところだが、女達では猶々困るだらう。兎もかくも人家のあるところまで一緒に行きませうよ。」

「ほんたうにお困りでせう。わたし達も先刻から困つてゐるんですよ。」

それは女の聲であつた。よく視ると、三人連の旅人は男と女と少年とであつた。勿論、その善悪は判らないが、この場合、彼等に縋つて里の方角へ案内して貰はうと思つたので、お末は御迷惑でも一緒に連れて行つてくれと頼んだ。男も女も快く承知して、自分たちが先に立つて歩き出すと、雨はだんくんに強くなつて来た。笠を持たないお末等を氣の毒がつて、男と少年とは自分の笠をぬいで貸してくれたので、お末はあつく禮を云つて、その二つの笠をお房とお俊とに被せて遣つた。前の三人連とあとの三人連とが一緒になつて、雨の夜路を急いでゆくと半時ばかりの後、に人家のある村へ着いた。

「こゝらに旅籠屋はありませんか。」

男が一軒の農家の門に立つて訊くと、これから一里ほど真直に行くと小さい町がある。そこには二軒ほどの旅籠屋があると教へてくれた。

「もう一里だ、譯はない。」

五二

皆なを勵まして男は歩き出したが、お末は行くことを躊躇した。一錢の路用も有たない自分達は、たとひ旅籠屋のある所まで行き着いても人並に泊まることは出来ないのである。乞食をしてゆく覺悟の自分達は、寧ろこゝらの農家に頼んで、軒の下か土間に寝かして貰ふ方が可いとも思つたので、彼女はこゝで旅人に別れようとした。

「どうも有難うございました。わたくし共はもうこれでお別れ申します。」

「こゝで別れる……。」と、男は不思議さうな顔をして「さうして、今夜はここに泊りなさん。」

その返事に口籠つてゐるのを見て、男も女もその事情を大抵推量したらしかつた。男は親切に云つた。

「いや、御心配なさんることはない。私達に任せて兎もかくも一緒においでなさん。」

今までの怖ろしい經驗に懲りてゐるので、お末は迂濶にその厚意を受入れることが出来なかつた。彼女は何うしようかと躊躇してゐるのを男と女とは切に勧めた。先刻からの様子が全く悪い人ではないらしく見えたのと、自分は兎もあれ、二人のお嬢様を成べくは一晚でも安樂に寝かしてあげたいと思つたのと、お末は到頭その人達のあとを附いてゆくことになつた。それから小一里の道をたどる中に、雨は土砂降りになつて来て、笠のないお末はびしょ濡れになつた。

行き着いたのは思つたよりも小さい田舎の町で旅籠屋の小さい穢い家であつた。それでも此の雨の夜に野宿をするよりも遙かに優である。お末は好い路連に出逢つたのを喜んで、彼等のあとを附いて一軒の旅籠屋に入つた。家は穢いが宿の者は皆な親切で、濡れて来た六人連を能く劬はつてくれた。飯を喰つて、風呂に入つてお末もお房もがっかりして了つた。お俊はもう居睡を始めた。

それでもお末はまだ油斷が出来なかつた。宿の行燈の下で、初めて路連の三人を

能く視ると男はもう四十位の商人風で、顔には薄い痘痕があつた。女はまだ二十八の小綺麗な顔で、その男の女房であるらしく思はれた。もう一人は十五六でこれも色の白い、伶俐さうな眼附をしてゐる少年であつた。女の名はお吉で、少年の名は藤太郎と云ふことは、先刻から相互に其名を呼ぶので判つた。

「さう云つては失禮だが、お前さん達の様子がどうも可怪い。」と、男は煙草を喫ひながら云つた。「一體どう云ふ譯で大阪へ行きなさんだ。斯うして路連になるのも何かの縁だらうから、何も正直に話して下さらないか、都合に因つたら、及ばずながら御相談相手にもならうぢやありませんか。」

何と返事をして可いかとお末は又躊躇した、併し世間には悪い人ばかり住んでゐる譯ではない。あまり、人を疑つて、折角の親切を無にするよりも、一通りは正直に打明けて其力を借りた方が優かも知れないと思つたので、彼女は自分達の身の上を話した。

「それはお氣の毒なことだお察し申しますよ。」と、男はひどく同情するやうに云つた。「實は私達は和歌山まで歸る者で、お前さん達と行く先は少し違ふが、それでも途中までは一緒に行かれる。若い女連で又どんな間違ひがないとも云へないから、寧ろ和歌山まで私達と一緒に來なさないか。さうして、和歌山から大阪までは船で行く。その方が無事だらうから、さうすることゝ決めなさい。」

女もそばから口を添へて勧めるので、お末もとうとうその氣になつた。彼女は何分お頼み申しますと夫婦の前に手をついた。

「私は名古屋の御城下に住んでゐる重藏と云ふ者です。覚えてゐてください。」と、男は初めて名乗つた。

あくる朝、重藏夫婦と藤太郎は三人の女を連れて宿を出た、宿の切定は無論、重藏が拂つてくれた。そればかりでなく、道中をするのに其姿では不可ないと云つて三人のために笠や草鞋を買つてくれた。雨はまだ止まなかつたが、幸ひに大降でもないので出發した。

六人は濱街道を辿つて行つた。幾ら氣がしつかりしてゐると云つても、お末もまだ十七である、お房は十五でお俊は十一といふ、揃ひも揃つて足弱の三人を連れてゐるので、道中は抄取らなかつた。飛んだ足手纏ひが出来て定めて御迷惑でござりませうと、お末は氣の毒がつて幾たびか詫びた。その都度に重藏は彼女を慰めて決して氣兼ねをなさらぬが可い、私たちは熊野様へ參詣して歸る途中で、お前さん達に丁度めぐり逢たつのは、不運な人を救つてやれと云ふ權現様の御指圖かも知れない、約りはこれも何かの功德と思つて爲ることであるから、必ず恩に着るには及ばないと親切に云つた。

それから二日三日の旅をつゞけてゆく中に、この重藏が悪い人でないらしいことはお末にも大抵推量されたので、彼女は自分達の運の好いのを喜んだ、唯はつきりと判らないのは此の人達の商賣であつた。どうも堅氣の商人ではないらしいと思ひながらも、彼女は明白にたづねるのを遠慮してゐたが、だん／＼馴染むに連れて重藏の方から話した。

「わたし達は妙な商賣でね、輕業を興行して諸國を渡つてゐる、今度も和歌山の御城下まで廻つて來たので、一座の者はそこへ殘して置いてわたし達三人が熊野様へ御參詣に行つた歸途ですよ。」

彼の商賣は輕業師であつた。彼は藤太郎といふ少年を自分の息子のやうに云つてゐるが、どうも實子ではないらしく思はれた。藤太郎は伶俐な兒で、お末等三人に對しても能く氣をつけてくれた。これで重藏の素性も判り、その氣心も大抵判つたので、お末もいよく安心した。

田邊の城下に泊まつた翌朝も細い雨が降つてゐた。宿を出てまた半里とも行かない中に、重藏は不圖思ひ出したやうに立停つた。

「あ、困つた。ゆうべの宿に燧袋を忘れて来た。」

「ぢやすぐに取つて來ませう。」

藤太郎は引返して行かうといふのを、重藏は止めて、わざ／＼取りに行くにも及ばないと云つた。

「でも、御不自由でございませう。わたくしが取つてまいります。」と、お末は云つた。過日からこの夫婦には色々の世話になつてゐるので、せめて斯ういふ時に何かの働きをしたいと思つたので、彼女は夫婦の止めるのを肯かすに引返した。

多寡が半里位と思つてゐたが、さて引返して見ると案外に遠かつた。ゆうべの旅籠屋へ行つて訊くと、果して燧袋が置忘れてあつたので、お末はそれを受取つて又引返した、雨はまだ止まないのので、泥濘をたどる女の足は捗らなかつた。往復に

半响あまりを費して、やう／＼舊のところへ戻り着いた、見るとそこには五人の姿がなかつた、待草疲れてそろ／＼歩き出したのかも知れないと思つた。彼女はつゞけて其後を追つて行つたが、五人のゆくへは判らなかつた。斯ういふ五人達を見掛けなかつたかと土地の者に訊いても、誰も確實に見たと答へる者はなかつた。

一種の不安がお末の胸に湧いた。迂濶氣を許したのが此方の過失で、あの輕業師といふのも矢はり悪者であつたかも知れない。あれほど親切らしく見せかけても、内心には針を包んでゐたのかも知れない。重藏と藤太郎は格別、あのお吉といふ女は顔こそ綺麗であるが何となく氣の置ける人物であつた、彼等は矢はり悪黨の群でお嬢様二人を拐引したのではあるまいか。さう思ふと、お末は氣の狂ふほどに驚いた。

彼女は足摺をして自分の油斷を悔んだ、彼等が果して悪者で、自分の隙を見てお嬢様を拐引したのであるならば、逆もこゝらにうろ／＼してゐる氣配ひはない、駕

籠に乗せるか、路を變へるか、所詮自分に追付かれぬやうに巧みに行方を晦ましたに相違ない。幾ら蹴いても無駄であらう、彼女はもう落膽して歩かれなかつた。「自分がお供をしてゐながら斯ういふ過失を仕出して、旦那様や奥様に、申譯がないうも死ぬより他はない。」

お末は雨に濡れながら自分の死場所を探した。彼女は街道の並木の松に細帯をかけて縊れて死なうと覺悟を決めて、一株の大きい松の下に立つて梢を瞰あげた。

「いや、死ぬのは早い。」と、彼女は急に又思ひ直した。彼女は涙を拭きながら考へた。

自分は一圖に拐引されたものと思ひつめてゐるが、或は何かの事情で、自分を待たずに先を急いだのかも知れない。さうして、先の宿へ行つて待つてゐるのかも知れない。たとひ果して拐引されたとしても、自分が今こゝで死んでは犬死である。兎も角も大阪へ行き着いて、御主人夫婦を探し當て、此始末をお報せ申さなければ

ならない。その上で死んでも遅くはない。いづれにしても眞直に急いで行つて見ようと思ひ直して、彼女は松の木の下を離れた。さうして雨の中を又急いだ。

次の宿へ行き着いても、五人のゆくへは矢はり判らなかつた。重藏に離れた以上彼女はいよく乞食になるより他はなかつた。それは最初から覺悟したことではあるがお嬢様を失つた悲哀が胸一ぱいになつた、彼女はその艱難を凌ぐ張合も失せてしまつた。彼女は大きい木を見ると首を縊らうかと思つた、大きい川を見ると身を投げようかと思つた。うす暗い夕方に海端を通る時などは、取分けてその魂を暗い浪の方に吸ひ寄せられやうとした。それでも彼女は努めて心を強く有つた。行かれるだけは何處迄も行かうと自分で自分を勵ましたながら歩いた。

斯うして幾日を送る間に、お末は紛れもない女乞食になつてしまつた。彼女は人の門口に立つて錢や米を貰つた、夜は人の軒下や神社の床下に眠つた。一座の者が和歌山にあるといふ重藏の話を中心當てに、彼女は兎も角も和歌山まで辿り着いて、

土地の人達にたづねると、その一座はもう二日ほど前にこゝを立去つたこの話であつた。お末は又落膽した。こゝでも彼女は死なうとして又思ひ止まつた。

勿論、彼女は船に乗ることは出来ないで、矢張り乞食の旅をつゞけた、紀州から和泉路へ入つた、岸和田から堺の浦を経て、小半月の後にやうく大阪へ着いたが、唯つた一枚の單衣は雨風に打たれ塵埃を浴びて、もう染色も判らないほどに穢れてしまつた。顔は目に燦けて、手足には苔のやうな垢が着いてゐた。この見苦しい姿で藏屋敷へたづねて行つても、恐らく誰も取合つてはくれまいと思つたので、お末は日の暮れかゝる刻時を待つて、丸龜の藏屋敷の門前に倒れてゐた。やがて門番がそれを見付けた。

「これ、これ、御門前に倒れてゐてはならぬ。早く行け、行け。」

お末は倒れたまゝで動かなかつた。門番も焦れて出て來た。

「これ、行かぬか。えゝ、行かぬか。」

何と云つても動かないので、門番も持餘した、お末は苦しさに唸つてゐた、いくら乞食でも病苦に悩んでゐるものを無慈悲に追ひ立てる譯にも行かないので、門番は迷惑ながら彼女を抱へ起して門前から離れたところへ運んで行かうとした。彼がお末のそばへ寄つて來た時に、お末は低聲で訊いた。

「あの、御屋敷に根井大之進様がお在でございませうか。」

「何、根井様……。それが何うした。」

「お在ならばお目にかゝりたうございますが……。」

主人戸崎新九郎の親しくしてゐる武士に根井大之進と云ふのがあつて、それが大阪の藏屋敷に詰めてゐることをお末は知つてゐたのである。門番は不思議さうにこの女乞食を見つめた。

「根井様に逢ひたい。お前は一體何者だ。」

お末は主人と自分の名を云つた。

「可、少し待つてゐろ。」

門番は澁々ながら内へ入ると、やがて四十五六の立派な武士が出て来て、お末の見苦しい姿をぢつと視た。

「お前は戸崎新九郎殿の召仕か。」

「はい。戸崎の召使で末と申します。」

「ほう、左様か。」と、大之進は思ひ出したやうに首肯いた。「主人の娘二人と海賊船に拐引されたのはお前であつたか。」

「では、もう御存知でございますか。」

「詳しいことは新九郎殿から承知してゐる。併し門前では話がならぬ。兎も角も此方へまゐれ。」

大之進は先に立つて門内へ入つた。その口吻によれば、主人は無事に大阪へ辿り着いて、大之進に逢つてゐるに相違ないとお末は先づ安心した。それにつけても、

お嬢様二人をお連れ申して來たらば、どんなに嬉しいことであらう。彼女は又今更に悲しくなつた。

第四 兩 國

(一)

松井大之進はお末を自分の長屋へ連れて行つて、先づ手足を濯がせた、腹が空いてゐるであらうと云つて、すぐに飯を喫はせてくれた。その親切を感謝しながらもお末の胸はまだ落付かなかつた。その顔色を察して、大之進は先づ話し出した。

「新九郎殿夫婦の衆は先月の末に當屋敷へたづねてまゐられて、途中の災難の顛末

を詳しく承はつた。手前も甚だ氣の毒に存じて、早速に町奉行所へも訴へ出で、ほかに心當りをも隈なく穿索いたしたが、娘達のゆくへは遂に判らぬ。夫婦の衆も力を落し、取分けて妻女は取亂して嘆かるゝ。それも無理ならぬことゝは存ずれども今更どうすることもならぬので、新九郎どのは思案の末に、江戸は繁華の地で諸國の人のあつまるところ、あるひは手懸りもあらうかと、半月あまりも此處に逗留の後に夫婦連で江戸表へ下られた、しかもそれは昨日の朝だ。

「昨日の朝……。」と、お末は眼を睜つた。

「あゝ、昨日の朝……。唯つた二日の違ひで残念であつたよ。」と、大之進も嘆息した。「して、娘達二人はお末と一緒にないか。」

訊かれてお末は返事に困つた。併しそれを隠すべき場合ではないので、彼女は今までの徑路を泣きながら話すと、大之進も顔に深い皺を織込ませた。

「数々の難儀手前も察し入る。併し假にも死なうなどと思ふな。お前の一心でも娘

達の所在は屹と判る。この上は氣を長くして穿索するより他はない、道中の疲勞もあらうから、先づ當分は遠慮なくこゝに休息して居れ。」

「ありがたうござりますが、妾に斯うして居られませぬ。」

お末は主人の跡を追つて行きたいと云つた。二日後れてゐては女の足で覺束ないとも思ふけれど、主人も矢張り足弱連であるから、此方が夜晝急いで行つたらば途中で追着かないこともあるまい。こゝでなまじひに身體ばかりを樂にして、心で苦勞してゐるよりも、身體も心も一緒に苦めて、張りつめた氣分で押通して行きたいといふのが彼女の願であつた。大之進にも異存はなかつた。

「それも無理もないことだ。然ういふ覺悟であれば引留める譯にも行くまい。併し今日はもう遅い。せめて今夜だけはゆる〜休息して、明日の朝早く出發するが宜からう。第一その姿では道中も出来ない。一通りの旅支度をせねばならぬ。」

それをも否み兼ねて、お末はこゝに一夜を明かすことになつた。大之進は仲間

云ひ付けてお末に相當した單衣ひとへものの古着を二枚買つて來させた。笠や杖や草鞋わらぢも用意させた。お末は重ねぐの親切かんじやを感謝して、あくる朝いよ／＼大阪に立退くと、大之進は女一人が江戸へ行き着くだけの路用ろようをくれた。加之も仲間しやに云ひつけて、八軒の船場ふなばまで送らせた。お末は淀の川船よかの川船に乗つて伏見に着いて、それから東海道を下つて行つた。

東海道はお末に取つて固より初旅はつたびであつた。併し今の人の想像さうぞうするやうなものはなく、何處の街道筋かいだうすぢも一筋路であるから、盲めくらでも京上りが出来るのである。賢さかしいお末は路に迷ふこと無しに眞直まつすぢに辿つて行つた。殊に今までは違つて一通りの旅拵たびごしらへはしてゐる。路用も有つてゐる。道中も繁華はんくわな東海道である。彼女は今度の旅に就いて何の苦痛くつうも感じない筈であつたが十七の女の獨旅ひとりたび、それだけでも此時代の人としては餘ほどの勇氣ゆうきが必要であつた。なまじひに今までのやうな乞食こじきでないだけに、却つて危険きけんが多いかとも危あやままれた。彼女は用心しんじんに用心しながら路みちを急いだ。

その意味から云ふと、夜の旅は禁物きんぶつであつたが、彼女は主人夫婦しゆじんふうふに追着くために、朝は早くから宿やどを出て、夜は遅くまで歩き通した。

一人旅ひとりたびを厳げんましく云ふ時代は過ぎて、この當時たうじは「ほかに同行一人」と、形式的けいしきてきに宿帳しゆくちやうに記せば、それで大抵たいていは済むことになつてゐたので、彼女は野宿のじゆくするやうな辛い目に逢ふことはなかつた。併し彼女の心こころを傷めたのは、三日経つても四日経つても主人夫婦しゆじんふうふに追ひ着かないことであつた。彼女は途中たてはの立場たてはでも訊きいた。宿へ入るごとに訊きいた。誰たれに訊きいてもそれらしい手懸てがひりを得ないので、彼女は失望しつぱうしながら無暗むやみに急いそいだ。

熱田あつたの宿まで行き着いた時に、彼女は名古屋の城下じやうかに入つて輕業師かるわざしの重藏じゆうざうをたづねると、成ほど重藏じゆうざうといふ者が住んでゐたことはある。併ししかそれからそれへと旅たびを廻り歩いてゐてもう五六年も戻もどつて來ないこのことであつた。お末は又失望しつぱうさせられた。こゝへ來るまではまだ幾分いくぶんかの心頼こころたのみもあつたのであるが、その頼たのみの綱つなも

既う切れた。宿屋のうす暗い行燈の前に座つた。彼女はその晩一人で泣いた。

一筋路であるから何うしても追ひ着かなければならない筈であるが、主人の足が早いのか、或は何處かで自分が行き過ぎてしまつたのか、或は主人が傍路へ外れたのか、道中の日数がだんだんに積つてお末が江戸へ着くまでの間、彼女はとうとうそれらしい人の影も形も見知り出すことが出来なかつた。斯うして彼女は兎も角も無事に江戸へ入つた。

大之進から貰つた添手紙を持つて、彼女はすぐに芝新堀の中屋敷へ行つて、藤田十太夫といふ人をたづねると十太夫も快く逢つてくれた。併し新九郎夫婦は江戸へ来ないと云つた。あるひは来てゐるかも知れないが、自分達のところへは何の音沙汰もないとのことであつた。お末はこゝでも失望させられた。それでも十太夫は彼女にひごく同情したらしく、色々親切に注意を與へてくれた。

若い女の身でそれからそれへと漂泊ひ歩くのは禍の本である。新九郎夫婦も遅か

れ速かれ江戸へ来るであらう。江戸へ来れば恐く自分のところへも何かの消息が聞えるであらう。旁々遠い他國を探ね廻るよりも、當分は江戸に落付いてゐて主人や娘達の消息を待つが可からう。さりとて唯べんくとしてゐられまいから、然るべき家へ奉公でもして其傍らに根好く探すが可からうと彼は云つた。お末もこの意見に従ふことにした。

「就いては其奉公先だが……。」と十太夫は又思案した。「普通ならば無論に武家奉公といふのであるが、斯ういふ希望を有つてゐるからは却つて町奉公の方が、何かに付けて便利であるかも知れぬ、私から出入町人に頼んで遣る。それまでは遠慮無しに逗留してゐろ」

かく先々で親切にして呉れるので、お末は悲しい中にも心強く思つた。萬事を十太夫に頼んで、しばらくこゝに足を留めてゐると、七月の初旬である。十太夫は外から歸つて来てお末に云つた。

「日本橋横山町に長門屋といふ刀屋がある。それは屋敷へも出入の者で、私は主人とも懇意にしてゐる。そこで仲働きの女中が一人欲しいと云ふから、兎も角も奉公に行つて見ては何うだ。居辛ければ又ほかへ行くまでのこと、別にむづかしいこともなす。」

「何分よろしく願ひます。」

「では、行くか、お前の身の上は主人にも能く話して置いたから、何かに付けて力を添へてくれるであらう。その積りで先づ辛抱するが可い」

「いろ／＼有難うございます。」

お末は次の日から長門屋へ住込むことになつた。長門屋は勘兵衛お袖といふ若夫婦と、ほかに一人の番頭と三人の職人と二人の子供があつた。女中はお末のほかには臺所を働く者が一人、併せて十一人家内であつた。先代の勘兵衛は去年死んで、今は若夫婦の身代であるが、なか／＼内福の生計であると云ふことをお末は他の朋輩か

ら聞いた。

奉公の暇を見てお末は時々新堀の屋敷へ聞合はせに行つたが、新九郎夫婦からは何の音沙汰もないことであつた。長門屋の主人夫婦は思ひ遣りのある人で、殊にお末の身の上を承知してゐるので、新參ながら目をかけて働つてくれたので、彼女も有難いことに思つて陰陽なく働いてゐた。江戸の盂蘭盆を初めて見舞彼女は残暑の強いのに可なり悩まされたが、それでも身體を傷めることも無しに勤め通してゐると八月になつて朝夕はだん／＼凌ぎ好くなつて來た。長門屋の狭い庭に栽ゑてある一本の碧桐に何處からか茅蠅が迷つて來て、さびしく鳴いてゐる夕暮であつた。十太夫が長門屋の店へたづねて來た。

「新九郎殿の消息が判つたぞ。」と、彼女がお末を店先へ呼び出して囁いた。

「左様でござりましたか。」と。お末は飛び上るやうに喜んだ。「さうして、お二人様とも御達者でござりますか。」

「そこだ。新九郎殿も不運でな。」

それは悲しい消息であつたが。娘二人とお末とに能く似た三人連を見たといふ者がある。夫婦は途中から路を替へて、中仙道の方角へ追つたが、結局それらしい者をも見出さなかつた。それから木曾路を江戸へ下る途中、信州の沓掛の宿で妻の千鶴は再び病氣になつた。色色の心勞と長い旅の疲れとに苛まれて、彼女は四五日の後に娘二人の名を呼びながら死んでしまつた。

こゝまで話して聞かされて、お末は聲をあげて泣いた。

「嘆くのは道理だが、まあ聴け。」

十太夫は宥めながら又話した。不運な戸崎新九郎は旅先で亡妻の葬式を済ませた。それや是れやで、彼は多くもない路用をます／＼費ひ果したので、大小を賣らないのを切つてものごとにして、見すばらしい姿で江戸に着いた。さうして、深川寺町の某寺の住職が同國の生れであるので、そこを頼つて一先づ草鞋をぬいだ。

「斯ういふ譯で、新九郎も重々氣の毒でならぬ。」と、十太夫も聲を陰らせわ。「お前も定めて案じてゐようと思つて、取りあへずこれだけのことを教へに來た。詳しいことは主人に逢つて訊くが可からう。」

お末は泣いて十太夫に別れた。その晩、彼女は主人から暇を貰つて、深川の寺へたづねてゆくと藪蚊の多い寺の座敷で主人の寝た顔を見せられた。新九郎は自分達の不運な話をした。お末の不運な話を聴いた。國を出でから四五月振でめぐり逢つた主人と家來とは、黄い秋の灯の下で暗い顔を見合はせてゐた。それでも新九郎は武士である。何かにつけて涙ぐむお末を諭すやうに云つた。

「斯う成行くのも時の運とは云ひながら、所詮は私の油断からだ、素性も知れない相宿の男にあざむかれて、我子も家來も拐引されたのは、重々の不覺で、罪は皆な私にある。たとひ娘達を見失つたからと云つて決してお前を咎めようとは思はない。千鶴は不憫であつたが是れも仕方がない、十太夫は何處へか仕官しろと勧めてくれ

るが、今更二度の主取する氣もない。この住職が親切に云つてくれるのを幸ひに當分この厄介になつて近所の子供達に讀み書きでも教へて世を送らう。お前も好い主人を取當てたを幸ひに、當分はそこに奉公して他ながら娘達の安否を探してくれ。」

「よく別りましてございます。とお末も涙を拭きながら云つた。『わたくしは自分のお詫に遅かれ速かれ屹とお嬢様を探し出します。どうぞそれまでお待ちくださいまし。奉公の身分でございませうから、始終御機嫌うかどひに出るといふ譯には参りませんから、あなたも何うぞ御機嫌よろしう。』

暇乞ひをして縁を出ると、庭の暗い芭蕉のかげに、秋の螢が一つ迷つてゐるのも悲しかった。お末は水のやうな夜風に涙を吹かせながら横山町の店へ歸つた。

(一)

それから曆が二度替つて、安政四年の夏が來た。お末はもう十九になつて、相變らず長門屋に奉公してゐた。主人夫婦にも可愛がられて、自分一人としては幸福であると思ひながらも彼女の胸を絶えず陰らせてゐるのはお嬢様二人の安否であつた。彼女は時々深川の舊主人をたづねた。その寺の住職から奥様の位牌を書いて貰つて、自分の部屋に飾つて朝夕に拜んでゐた。

五月の川開きが過ぎてから二日目の夕方である。小僧の次郎吉が晦日の懸取に行つた歸り途に道草を食つて、兩國の觀世物小屋を覗いて來たらしく、店先で水を撒きながら他の小僧に話してゐるのが不圖お末の耳に入つた。

「今度の輕業は面白いせ。男も女も皆な若いんだ、女は一人が十七八で、一人が十二三だが、何方も巧いせ、さうして美しい女だ。もう一人十七八の男もゐたが、これ

が男だけに一番上手だ」指を折つて數へるまでもない、それがお房とお俊との年頃に符合してゐた。もう一人の少年といふのは彼の藤太郎ではあるまいか。斯う思ふと、彼女はこの話を迂濶に聞き流す譯には行かないので、すぐに次郎吉に聲をかけて訊いた。

「いゝえ、お前さんが道草を食つてゐたことをお内儀さんに密告るんぢやない。唯妾が少し訊きたいことがあるから教へて下さい。」

彼女は次郎吉を賺して、その輕業師の人相や風俗を詳しく訊き糺した、併し小僧の話だけでは何うも確實なことが判らなかつた。一座はその三人ばかりでない、ほかに大勢の男の兒や女の兒が出てゐると云ふのである。して見るとこれが果してお房姉妹と藤太郎であると直に決めてしまふことも出来なかつた。世間に若い藝人の群は幾許もある、單に輕業師といふだけで彼等を自分の探してゐる人間と決める譯には行かなかつた。彼女はしばらく迷つてゐた。

「それでも念のために一度行つて見ませう。」と彼女は思つた。併し兩國の觀世物小屋は日が暮れると皆な閉めてしまふのである。彼女は明日の午過でなければ其實否を見とゞけることは出来なかつた。

何だか落付かない心持で、彼女は奥の用を片附けて了つて、自分の部屋へ戻つて來ると、店にはもう燈火がついた。長門屋の店先には小さい縁臺が持出されて、職人や小僧どもは星を見ながら納涼んでゐた。

「今晚は。」

三十七八かと思える町人風の男が薄暗い店先へ入つて來た。さうして、道中指を一本見せてくれと云ふので、番頭の銀右衛門が出て挨拶した。男は最初に道中指を出させて二三本捻つてゐたが、結局に道中指を止して匕首を見せてくれと云つた。

これは尋常の人間でないと思ふと銀右衛門は見た。悪いことをする奴等に限つて、何だ

か氣が咎めるかして最初から匕首や短刀を見せろとは云はない。最初には屹と道中指とか何とか云つて、それからだんくんに短刀とか匕首とか云ひ出すのである。斯ういふ人間を相手に商賣をしないのが長門屋の家風になつてゐるので、銀右衛門は十分に判つた。

「折角でございりますが、手前店では匕首を賣りませんので……御覽の通り、長いものばかりでございませう。」

「さうか、ぢやあ、仕方がねえ。大きにお邪魔」

男はそのまゝ出て行つてしまつた。お内儀さんの供をして近所の錢湯へ行かうとして、今恰も店先へ出たお末は、彼の胡散らしい客の横顔をちらりと見た。それは何うも見覚えのある顔であるらしかつた。お末は兵庫の濱邊で自分達を拐引して行つた彼の熊吉といふ海賊の顔を思ひ出した。思はず低聲であつと叫んで、彼女はあわてゝ下駄を突っかけて店の外へ出て覗いたが、蝙蝠を追ふ子供の群に隔てられて

男の後ろ影はもう見えなかつた。

熊吉を取押へたところで、お嬢様達のゆくへは知れないのは判つてゐた。お嬢様達は彼の手を逃れてから、更に他人に拐引されたのである。併しお末は口惜かつた。果して彼がその熊吉であるとすれば、自分達の仇である、彼のやうな海賊どもを捕へるのは世の爲である。このまま取逃すのは如何にも口惜いと思つたが確實に彼が海賊であるか何うか能く見極めもしないで迂濶に自身番へ訴へて出たところで恐く取合つてくれまい。まして既う彼の姿は見えない。今更どうすることも出来ないので、彼女は苛々する胸を無理に壓付けながら、何氣ない顔をして主人のあとを附いて行つた。

どう考へても彼女は残念であつた。それと同時に彼女の胸には云ひ知れない一種の強味を覺えて來た。自分の年來の希望がいよゝ成就すべき時節に到着したやうに感じられたからである。今日は子僧の次郎吉の口から觀世物の娘の噂を聞いた。

それにつづいて海賊らしい男の姿を見た。輕業の娘二人が果してお嬢様で、彼の男が果して熊吉であれば、もう萬事がこごとく解決するのである。斯う云ふ風に物事が順序よく運んでゆく場合がないでも無い。自分の一念だけでも斯うなるべき筈である。熊吉は先づ二の次として、明日は是非ともこの輕業の娘を見とゞけて來なければならぬと思つた。

湯から歸つて來て、彼女は主人夫婦の前へ出で窃と其話をすると、主人の勘兵衛も明日すぐに見て來いと云つた。

「その輕業の噂は妾も聞いてゐます。お末が見に行くなら妾も一緒に行きませう。」と女房のお袖は云つた。

主人のお内儀さんが一緒に行くつても、別に邪魔になる譯でもないのです。お末はお供を致しませうと約束した。あくる日午飯を濟ませると二人は連立つて店を出た。出る時に主人はお末に注意した。

「たとひ其娘がお嬢様であつても、その場で無暗に立騒いではならない。居所さへ判れば取戻す法は幾らもある。嘘か眞當かを見とゞけたら、黙つて歸つておいでよ。」

「かしてまりました。」

横山町から兩國までほんの一跨ぎの路程であるが、今日に限つてお内儀さんの足が遅いやうに思はれて、お末は途中でも苛々した。彼女の魂はもう河向うへ飛んでゐるのであつた。兩國橋を渡つて、東兩國の河岸へ出ると、そこには色々の觀世物小屋が軒を列べて囃し立てゝゐた。二人は群集に揉まれながら輕業の小屋を探して入ると、今日は朔日だけに一杯の客で、蒸されるやうな暑苦しい空氣の中に、白い扇や赤い團扇の影がひらひらと亂れて動いてゐた。二人は汗臭い混雜の中へ押込まれて窮屈さうに立つてゐると、やがて舞臺の幕は明いた。

舞臺と云つても粗削りの板を並べたばかりで正面には牡丹には唐獅子を染め出し

た木綿の後幕が垂れてゐた。その幕の前に若い娘が代るく出て来て色々の藝當を演ずるのである。ある者は一本齒の高い下駄を穿いて歩いた。ある者は大きい鞠の上に乗つて轉がしながら歩いた。ある者は床几を澤山に積み重ねた上に登つて床几を一脚づゝ蹴落しながら片足でだんぐりに降りて来た。彼等は皆な長い振袖を着て黒や萌黄や紫の袴をつけてゐた。

入代り立ち代り出て来る五六人の娘の中に、一人もそれらしい者の見えないのにお末はひどく失望した。お袖は低聲で彼女に訊いた。

『あの中なかにゐるのかえ。』

お末は悲しさうに頭を掉つた。而も呼吸をつめて一心に舞臺を見つめてゐると、その中に下座で唄の聲が聞えて、舞臺には高く張渡してある綱の上に、右と左から派手な姿の人物があらはれた。左から出たのは鷹匠であるらしく、片手に鷹を据ゑた美しい若衆であつた。右から出たのは振袖を着た女で、塗立を深くして片手に藤

の枝をかたげてゐた。二人は唄に合はせて調子よく踊りながら、高い綱の上を渡つて来た。一足踏み外せば舞臺に落ちなければならぬ。この危あやい藝當が一日の呼物であるらしく、観客は一度に嘖鳴つて褒めた。

『あれは大津繪だよ。』とお袖が教へてくれた。

『此方がお若衆で、此方が藤娘だよ。』

成ほどこれは大津繪の畫面の姿であるとお末も合點した。さうして、その若衆が藤太郎で、藤娘がお嬢様の一人ではないかとも思つたが、斯うしたものを見馴れない彼女の眼には、白粉を濃く塗つて色々の化粧を施した若衆の顔の上から、彼の藤太郎らしい記憶を呼び出すことは困難であつた。藤娘は深い笠と其笠の紅い紐とが邪魔になつて、白い顔から何物をも見出すことが出来なかつた。お末は實に焦つたかつた。

其五 置いてけ堀

(一)

高い綱の上に踊つてゐる大津繪の二人連は、彼の藤太郎とお嬢様の一人であらうと、お末は眼を据ゑて舞臺を見つめてゐる中に、偶然の過失か、或はわざと斯うして観客に美しい顔を見せる積りか、藤姫は袖をひるがへす機にその塗壁をはらりと落した。その顔はまだ子供であつた。その子供らしい顔が、妹娘のお俊であるらしいことを發見した時に、お末は思はず胸を跳らせた。彼女は自分の前に立つてゐる人を押退けるやうにして、伸上つてぢつと、瞰あげるとそれは確實にお俊であつた。

それと同時に、藤太郎であらうと初に想像してゐた彼の若衆が何うも姉娘のお房であるらしく思はれて來た。

お末は嬉しかつた。それと同時に新しい不安が又湧き出して來た。三年越し尋ね明かしてゐたお嬢様二人は、高い綱の上で危どい藝當を演じてゐるのである。もし一足踏み損じたらば、粗木の舞臺の上へ眞逆さまに落ちなければならぬ。斯うした物を見馴れないお末は競々して手に汗を握つてゐたが、堪らなくなつて彼女は主人の女房に囁いた。

「あんなことをしてゐても大丈夫でせうかねえ。」

「そりや商賣だもの。馴れてゐるから滅多に間違ひはないのさ。」

お袖は平氣であるらしいので、お末も少し安心したが、それでも胸は落付かなかつた。早く幕を閉めて呉れれば可いと切りに祈つてゐる中に、その踊はやう／＼に濟んで、綱渡りの女藝人は見物に會釋しながら幕を卸した。お末はほつとするより

もがっかりして、少時は大きい嘆息をついてゐた。お嬢さまの所在が判つた以上お末はもう後の藝を見物してゐる氣にもなれなかつたが、お内儀さんの供をして來てゐるのであるから、彼女を置去りにして中途から歸るやうな我儘も出來なかつた。彼女は我慢して終まで見物してゐたが、お嬢様らしい二人は再び舞臺にその顔を見せなかつた。

木戸を出ると、お袖は又訊いた。

「お嬢様は何うしても見付からなかつたかえ。」

「見付かりました。あの天津繪を踊つたのが御姉妹らしく思はれます。藤娘は確實に妹御様です。」と、お末は囁いた。

「そりや好かつたねえ。」と、お袖も嬉しさうに首肯いた。「ぢやあ、早く歸つて旦那に相談して御覽よ。」

二人は急いで長門屋へ歸つた。主人の勘兵衛はお末の話を聽いて、これも一緒に

喜んで。

「さう判つた以上は早く深川へ行つて、御主人にお報せ申すが宜からう。併し相手は悪い奴等だから、お嬢様達を何處へか隠してしまつて、何の彼のとシラを切るかも知れないから、寧ろ岡つ引の衆に頼んで、その方から掛合つて貰つた方が早く埒が明くだらうと思ふ。私は岡つ引に知合はないが、町内の頭を頼めば屹と好いやうに話してくれる。その方の掛合は私が引受けるから、お前は早く深川へ行つて來るが可い。」

「何分お願ひ申します。」

お末はすぐに深川の寺へ急いで行つた。新九郎は少し暑氣中りの氣味で横になつてゐたが、その報告を聽いて跳ね起きた。

「むゝ。娘二人の所在が知れたか、それは忝けない。して、その輕業の者どもは何處に住んでゐる。」

それはお末も知らなかつたが、彼等が兩國の小屋に住んでゐるのでないことは判り切つてゐた。どこか近所に宿を取つてゐるか、借家をしてゐるか、二つに一つに相違ないと思つたので彼女は自分の考へてゐる通りを話すと、新九郎はこれからすぐに兩國へ行かうと云つた。

「小屋の内には留守番の者が居らう。それを詮議すれば彼等の居所も判る筈だ。さあ、一緒に来い。」

長門屋の主人は岡つ引を頼んで遣ると云つたそれに頼んで掛合つて貰ふ方が無事であらうとお末は一應注意したが、新九郎は肯かなかつた娘達の所在が知れた以上彼はもう一刻も猶豫することは出来ないと思つた。思へばそれも無理ではない、彼は妻を亡つて三年越し、孤獨のさびしい月日を送つてゐるのである。その娘二人の所在が今偶然に判つたので、彼は飛んで行つて其娘に逢ひたかつた。その娘を仇の手から取戻したかつた。實を云ふと、お末も一刻も早くお嬢様に逢ひたかつたので

彼女は強て主人を遮り止めようとはしなかつた。

「では、すぐにお越しになりますか。」

「おゝ、すぐに行く。案内してくれ。」

衣服を着替へて袴を穿いて、新九郎はお末と一緒に寺を出た。それから兩國へ行き着いた頃には、六月の長い日も既う暮れかゝつて、列び茶屋の軒提灯が涼しい影を大川の流に落してゐた。新九郎はお末に教へられて、輕業の小屋の前に立つと看板はもう取卸されて内は閑寂と鎮まつてゐた。二人は更に裏木戸の方へ廻ると樂屋番らしい老人が大きい團扇を持つて木戸口に涼んでゐた。

「お前はこの小屋の者か。」と、新九郎は訊いた。

「左様でございます。」

「此小屋に出てゐる藝人どもの宿所は何處だ。」

「はい。」と、老人は窪んだ眼を光らせて新九郎の顔色をじろく眺めてゐた。

「何處だ。早く教へてくれ。」

「藝人の誰をおたづねになるのでございます。」

「藝名は知らぬが、一人は十七、一人は十三の娘だ。」

「何の御用でおたづねになるのでございます。」と、老人はいよ／＼その眼を光らせて訊き返した。

「何でも云ひ、早く云へ。」と、新九郎は少し焦れ出した。「是非逢ひたい用がある。早く教へろ。」

藝名が判らなくては教へられないと老人は云つた。一座の者は分れ／＼に宿を取つてゐる一座には十二三から十六七の娘藝人が多勢ある單にその年頃を聞いただけでは何處に泊つてゐる誰のことであるか判らないこのことであつた。それも一應は道理かと思つたので、新九郎は二人の娘の實名を云つたが、實名では矢はり判らないらしく、老人は困つたやうな顔をしてゐた。

「それにしても一座の人達は何處と何處にゐるんです。」と、お末も苛々して訊いた。「本所の花町にゐる者もあります。お前さん方のおたづねなさるのは多分そこらにゐるでせう。」と、老人は花町の宿を教へてくれた。

二人は挨拶して別れた。さうして、花町の方へ行かうとして五六間ばかり歩き出した時、お末は不圖見かへると、彼の樂屋番の老人が浴衣の裳をからげて駒止橋の方角へ小走りに急いで行くらしかつた。

「おや。」と、お末は思はず叫んだ。彼の老人は自分達に好加減の嘘を教へたのではあるまいか。さうして、自分達の探しに來たことを眞實の居所へ報せにゆくのではあるまいか。斯ういふ疑惑が彼女の胸の暗い影に投げたので、急に立停つて主人の袂を曳いた。

彼女の囁きを聽いて新九郎も心づいた。

「憎い奴め。」

あわだゝしく背後を見かへると、老人の姿は夕闇にかくれて既う見えなかつた、新九郎は齒咬をして立停つた。これはお末が推量の通り、自分達をあざむいて飛んでもない方角へ出して遣つて、その間に彼等の居所を隠すに相違ないと思はれた。新九郎は案内者として彼を一緒に連れて來なかつたのを悔んだ。

「又しても油断して不覺を取つたか。」と、彼は足摺りして悔んだが既う遅かつた。お末、の眼にも口惜涙が浮んだ。

彼の老人が駆付けて注進したからは、一座の奴等は面倒を恐れて姿を晦ますか。左もなくばお房とお俊の二人を何處へか押隠してしまつてそんな者は一座にゐない。とシラを切るか。いづれにしても詮議は餘程むづかしいことになる。折角斯うして尋ね當てながら、少しの油断で又又仕損じたかと思ふと、お末は泣いても泣き足りないほどに口惜がつた。さりとて何處を當に老人のゆくへを尋ねやうもないので、二人は力が抜けたやうに路傍に少時ばんやりと突つ立つてゐた。

「末、残念だ喃。」

「この上は致方がござりません。兎も角もわたくしの主人の店までお出で下さいまし。」と、お末は云つた。「さうして主人にお逢ひ下さいましたら、又よい工夫があるかも知れません。」

彼女は主人を勵まして兩國橋を渡ると、夕納涼の白い人影が橋の上を繋つて通つた。その混雑の中を忙しさに潜りぬけて、二人は汗を拭きながら長門屋に歸り着くと、店には三十四五の男が白扇を遣ひながら主人の勘兵衛と話してゐた。

新九郎は一度この店へたづねて來て、主人とはもう知合になつてゐるので、勘兵衛が挨拶が済むと直に其男を引合はせた。男は幸次と云つて、こゝらを自分の持場としてゐる岡つ引であつた。あらためて話するまでもなく、江戸時代の岡つ引は今日の探偵である。長門屋の勘兵衛は町内の鳶頭からこの岡つ引に頼み込んで、戸崎の娘二人を無事に取戻して貰はうと云ふのであつた。

(11)

「そりやあ些と拙いことをしましたね。」

幸次は新九郎の話を聞いて眉を寄せた。

「その樂屋番の老爺は源助といふ奴でせう。あなた方に一杯食はせて、玉を早く隠して了ふ魂膽に相違ありません。」

その鑑定によると、一座の者が皆な姿を隠してしまふ筈はない。恐く問題の娘二人だけを何にかへ隠してしまつて、そんな者は此方にゐないと強情を張通す積りであらう。それならばそれで此方でも料見があるから心配するには及ばない。萬事は自分に任してくれと彼は云つた。斯うなれば既う自分の手では不可ないと見て、新九郎はくれぐれも彼に頼んで歸つた。

「親分さん。どうでせう巧く無事に取戻して頂けるでございませうか。」と、勘兵衛はまだ不安らしく幸次に訊いた。

「ええ、どうにかします。」と、幸次は受合つた。

「就ては肝腎の玉の見識人が無くつちやあ困るんですが、お末さん、お前も一緒に來てくれないか。」

「はい。何處へでもまわります。」と、お末はすぐに承知した。

「ぢやあ、些とも早いが可い。」

幸次はお末を連れて長門屋を出た。彼は兩國へ行つて、その輕業の隣の小屋をたづねた。さうして、その樂屋番の口から輕業の一座の居所を聽いて彼等は駒止橋から半町ばかり入つたところの荒物屋の二階を借りて雑居することを確めたので、幸次はすぐに其處へ足を向けた。

「おい、輕業の仲間には此方の二階にゐるのかえ。」と、幸次は店先から聲をかけるこ

眼のしよぼくした老婆が蚊いぶしの煙の中から幻影のやうにその皺だらけの顔を浮き出させた。

「はい。何人さままでございます。」

「誰でも可い。逢へば判ると云つて、一座の親方をこゝへ呼んでくれ。」

その聲が二階まで聞えたらしく一人の男が低い階子を降りて来た。彼は小腰をかめて叮嚀に云つた。

「わたくしに御用と仰しやいますのは……。」

「少し訊きたいことがあつて来た。」と、幸次は店へ腰をかけた。お末は矢はり店先に立つてゐた。

「おい。もつと此方へ出て来てくれ。奥へ引込んであちやあ談話が達かねえ。」

幸次に催促されて、男も店の端へ出て来た。その顔を一目見て、お末はすぐに氣が注いだ。彼は紀州で出逢つた名古屋の輕業師といふ重藏に相違なかつた。

「早速だが、お前さんの一座にお房とお俊といふ姉妹の娘がゐますかえ。」

「いゝえ。」と、重藏は少し考へながら答へた。

「さう云ふものは一座に居りません。」

「確實にゐませんかえ。」

「ええ。」

幸次は窃とお末の顔を見た。それは此の男を見識つてゐるかといふ合圖であるらしいので、お末は遠慮なく進み出た。

「どうも久濶でございました。その節は色々御厄介になりました。」

挨拶をされても、重藏は空呆けてゐた。

「はい。お前さんは何人で……。ついお見それ申しましたが……。」

「紀州で御厄介になつた者でございます。田邊の御城下でお前さんの燧袋を宿屋まで取りに歸ると、その間にお前さんやお嬢さま達の姿が見えなくなつて了つたの

で、今まで何んなに探してゐたか知れませんが。」

「もし、もしそれは何かの間違ひぢやありませんかえ。」と、重藏は不思議さうな顔をしてゐた。『成ほど、わたしは商賣で紀州の方へ廻つたこともあるが、お前さんのやうな人に一度も逢つた覚えはありませんよ。さうして、燧袋だの、お嬢さんだの、何のことだか些とも判りませんね。わたしの顔をよく見てください。人違ひぢやありませんかえ。』

相手が飽までも落付拂つてゐるので、お末は案外に思つた。併し何う見直しても彼は彼の重藏に相違なかつた。

「お内儀さんや息子さんは何うなさいました。お達者ですかえ。」と、お末は又訊いた。

「わたしに悴はありませんよ。」と、重藏は矢はり平氣で答へた。

「息子さんがあつたぢやありませんか。藤太郎と云ふ……。」

「はい。」

一方が落付いてゐれば居るほど、お末は苛れて來た。

「では、息子さんのことは別として、今日あの小屋で大津繪を踊つた二人は……。あれは何といふ人です。」

「あれはお照とお島です。」

「いゝえ、違ひます。今は何と云つてゐるか知りませんが、あれはお房にお俊といふお嬢様に相違ありません。論より證據、その二人をこゝへ呼んでください。」

「ようございます。」

彼は二階へむかつて二人の名を呼ぶと、お照とお島といふ二人の娘が派手な浴衣を着て、徐かに二階から降りて來た。

「大津繪を踊つたのはこの二人ですよ。」と、重藏は笑ひながら云つた。

それは無論お房とお俊ではなかつた。お末は少し行き詰まつて、黙つて其二人の顔を見くらべてゐると、重藏は又笑つた。

「どうです。これはお前さんの識つてゐる人ですか。」

「いゝえ。」と、お末は頭を掉つた。「違ひます。大津繪を踊つたのはこの人達ぢやありません。いゝえ、たしがに違ひます。」

「それがお前さんの見違へですよ。」

「いゝえ、見違へぢやありません。」

急ぎ込んでまだ何か云はうとするお末を、幸次は制した。

「もう可い。判つた、判つた、おい、輕業の親方。氣の毒だが、その番屋まで来てくれ。」

「へえ、何の御用でございませう。」

「何でも可い。ちよいと来てくれ。」

「かしこまりました。」

重藏は柔順に引立てられて出た。幸次はお末をそこに待たせて置いて、重藏を町内の自身番へ連れて行かうとすると、彼はうす暗い路傍に立停つて岡つ引に嘯いた。

「親分さん。どんなお調べか知りませんが、何分お手柔かに願ひます。その代りにわたくしも一つの御奉公をいたします。もう御存知かは知れませんが、この頃こちらに海賊の仲間が立廻つてゐるんです。」

「何といふ奴だ。」

「熊吉と云ふんです。」と、重藏は云つた。「彼奴は悪い奴で、海賊船の船頭共と同腹になつて色色の悪いことを遣つてゐるんですが、中國筋は詮議が厳しくなつたのでこの頃は江戸へ下つて來てゐるんです。宿は何處だか知りませんが兩國の界限にも時々面に見せます。」

「どうか。よく教へてくれた。」

幸次は彼を自身番にあづけて引返して来た。一町内に大抵一ヶ所づゝある自身番には、八疊乃至六疊ぐらゐの板間の留置場が設けられてゐて、生酔や犯罪嫌疑者は一先づこゝに押籠められてゐるのであつた。斯うして置けば彼は取逃す虞はない安心して、幸次は再び舊の荒物屋へ来て見ると、待つてゐる筈のお末はそこにゐなかつた。

(三)

重藏が幸次に引立てられて出たあとで、お末は荒物屋の店先にたゝすんでゐると二階から又一人の女が窺と降りて来た。

「お末さんぢやありませんか。」

今度は先方から聲をかけられて、お末はあわてゝ其聲の主を窺ふと、それは重藏の女房のお吉であつた。お吉は摺寄つて来て叮嚀に挨拶した。

「どうも久闊でございました。その節は失禮ばかり致しました。」

「いゝえ、わたくしこそ御厄介になりました。」

「いま一緒に見えたのは御用聞の方ですか。」と、お吉は低聲で訊いた。

「さうです。」

お吉は少し考へてゐるらしかつたが、やがて又低聲で云ひ出した。

「あの時には何ういふ行違ひになつたんでせうかねえ。わたくし共の方では幾ら待つてゐてもお前さんが見えない。その中に雨はだんゝに強くなつて来る。何しろ路傍に何時まで立つてもゐられないと云ふので、皆なが相談の上で次の宿まで歩き出して、そこでお前さんを待合せてゐたんですけれども、矢張り見えない。皆なも實に困つてしまつて……。いゝえ、それからすぐにお嬢様二人を大阪へ送つてあげ

れば可かつたんですけれど、正直のところ、此方にも路用の都合がありましたね。その上和歌山まで行つて見ると、残して置いた一座にも少し面倒が起りましてね。それや是れやで何うすることも出来ないの、早々に和歌山を引揚げて旅へ出ることになつて了つたんです。と云つて、眞逆にお嬢さま達を置去りにも出来ませんからそれからそれへと方々を一緒に歩いてゐる中に見様見真似でお嬢さま達も輕業を遣つて見たいと云ふんです。無論一旦はお止め申したんですけれど、是非遣つて見たいと云ふもんですからどう〜一座の人にして了つたやうな譯で、どうぞ惡く思はないで下さる。」

半信半疑でお末は黙つて聽いてゐると、お吉は又囁いた。然う云ふ事情であるから、お房もお俊も確實に自分達の一座にゐる。それを居ないと詐つたのは無論、重藏の不都合であるけれども、折角是まで丹精してやう〜一人前の藝人に仕立つた者を、今むざ〜と取返されて了つては何にもならない。それで彼は詐つたのであ

る。詐つたのは重々悪いが、その事情を察して勘辨して貰ひたい。その虚偽も大抵露顯して、彼が自身番へ引立てられた以上、もう包み隠してもゐられない。寧ろ今の中にお嬢様二人をお前さんに早く引渡して、自分達は決して拐引でないと云ふことを證明して貰つて、彼の罪を救はなければならぬ。然しその二人は全くこゝにはゐないのであるから、自分と一緒にそこまで来てくれと彼女は頼むやうに云つた。

お末はまだ油断しなかつた。併しお吉の云ふことも全然嘘であるとは思へなかつた。それが拐引であるか無いかは別問題として、重藏は自分の折角仕込んだ藝人をむざ〜取返されないために、見す〜居る者をゐないと詐つたのは事實である。その罪を救ふがために、お吉が二人を此方へ引渡さうといふのも眞實であるらしい。お末は結局彼女の願を肯いて、お嬢様達のゐるところへ案内して貰はうと思つた。

「さうして、お嬢さまは何處にゐるんです。」

「すぐそこです。御案内しますからどうぞ一緒に来て下さい。」

先に立つてお吉は表へ出ると、淺草寺の五つ(午後八時)の鐘が丁度聞えた。五つと云へば此頃ではまだ宵であるが、片側町のやうになつてゐる此處らは寂しかった。何處かの家で題目太鼓の音が響いた。お末はお吉のあとに附いて本所の奥の方へ二町ほども辿つたかと思ふと、そこには堀割の川が夜目にも薄白く流れてゐた。案内者は川岸に向つた小さい旗本屋敷の前に停つた。

「御門番さん御めんなさい。」

お吉は低い聲で案内すると、門番の老爺が窓から首を出した。お吉は溝の縁へ近寄つて何か囁くと、門番はすぐに潜り門をあけて二人を通した。門の中は暗かった。案内を知らないお末は、お吉の白い姿を目的に探りながら續いてゆくと、お吉は内玄關らしい格子口に言つて再び案内を求めた。やがて奥から出て來た男にむかつ

て、彼女は又何か囁くと、男はうなづいて二人を奥へ通した。廊下傳ひに奥ふかく進んでゆくと、そこには一間の暗い部屋があつた。お吉はお末の袖をひいた。

「この部屋にお嬢さまを預けてあるんですよ。」

部屋の中に燈火はなかつた。お末はその暗い奥を透して視ようとする途端に、お吉は力任せに彼女を内へ押込んだ。さうして、入口の板戸をびたりと閉めて、外から錠を卸してしまつた。その錠の音が胸にひびいて、お末ははつと氣がついた。彼女は自分をだまして此處へ連れ込んで、座敷牢のやうな處へ押籠めたのであらう。油断しない積りでゐながらも、矢はりお嬢さまに會ふのを急いで、又しても悪者に圖られたのであつた。お末は身悶えして自分の淺幕を悔んだ。

それにしても此處は何處であらうかと彼女は考へた。夜目ではあるが、門の構へや長屋窓の作り方が確實に武家屋敷に相違ないらしく思はれた。それも御家人でない、兎もかくも旗本の屋敷である。瘦せても枯れても天下の旗本ともあるべき者が

こんな輕業師の悪者どもの味方になつて、自分を座敷牢へ押籠める—そんな間違つた理屈があらう筈はないと彼女は疑つた。いくら疑つても事實は事實である。自分はこゝに囚はれて了つたのである。一體この末どうなるのであらうか。どんな目に逢つても、それは自分の不運と諦めれば濟む、自分の不覺と諦めれば濟む。併し何うしても諦められないのは、お嬢様二人の身の上である。折角これまで探り出してもう一息といふところで仕損じて了つては、旦那様に濟まない、自分の役目が濟まない。彼少は濕つぽいたゝみの上に俯伏して泣いてゐると、人の匂ひを嗅ぎ付けた藪蚊が部屋の隅々から唸り出して、彼女の襟首や手足へ容赦なく襲つて來た。

夜と云つても、風通しの悪いこの部屋は蒸されるやうに暑苦しかつた。蚊は間斷なしに攻めて來る。お末は呼吸が詰まるほどの苦しさを堪へながら、袂で藪蚊を拂つてゐる中に、彼女は不圖思ひ附いたことは、矢張り旗本の屋敷である。悪い旗本の屋敷である。こゝらには性の悪い旗本が幾人も住んでゐて、町人などを引入て詐

欺博奕をする。さうして、金は勿論、衣服でも帯でも何でも置いて行けど、身ぐるみ剥いで彼等を追ひ出すので、こゝらの堀を俗に「置いてけ堀」と呼んでゐる。この屋敷も屹とその「置いてけ堀」の仲間に相違ない。成ほど「置いてけ堀」の主ならば、悪者どもの加勢も仕兼ねまい。斯う覺ると、お末はいよゝゝ悲しくなつた。自分をこゝへ押籠めて、お吉は何處へ行つて了つたであらう。兎もかくも隙を見て此處を逃げ出すより他はない。それには温和しく見せかけて、敵に油斷させるが上分別だと思つたので、お末は呼吸を呑み込んで鎮まり返つてゐると、頸筋には粘つたやうな膏汗がじとじとと滲み出して、藪蚊の口吻に螫された手や足は痒いのを通り越して痛いほどに腫上つて來た。

その中に人の話聲が彼女の耳に入つた。

「まだ痛むんですか。水で冷しませうか。」

「其程でもないが、少し動かすと矢張り痛い。」

何か怪我人でもあるのかしらとお末は思った。さうして、その聲のする方角を聞き定めようとして耳を引立てゝゐた。

其六 壁の穴

(一)

人の話聲はそれぎりです時止んでしまつた。お末がいくら耳を引立てゝも、蚊の唸り聲のほかには既う何にも聞えなかつた。彼女は失望して低い嘆息をついてゐると、やがて又どこかで囁く聲が洩れた。

「少し熱が出たやうですね。」

それは若い女の聲であるらしかつた。相手はそれに對して何と答へたか判らなかつたが、女の聲は又聞えた。

「どうして今日はお醫師が来てくれないんでせう。」

聲は確實に次の間から聞えるのであつた。さうして、その聲が何となく聞覚えがあるやうに思はれたので、お末は呼吸をつめて聴き澄ましてゐると、若い女は又云つた。

「妾、これから行つてお醫師を呼んで來ませうか。だんくんに熱が高くなるやうだと困りますから。」

油断のないお末の耳には、その聲が何うもお嬢様のお房であるらしく思はれたので、彼女の胸は俄に躍つた。彼女は次の間との境を見付け出さうとして暗い中を探り廻ると、手に觸れたのは壁であつた。壁は古くなつて餘ほど傷んでゐるらしく、ところどころが頽れてゐるのは手障りでも大抵想像されるので、お末は何處にか小さ

い穴を見付けたいと、そろ／＼這ひ起きて其の壁の上から下までを根よく撫で廻してゐる中に、丁度自分の立つるゐる胸のあたりに可成に深く頽れてゐる場所のあることを發見した。彼女は簪を挿してゐなかつたので、黄楊の櫛を取つた。櫛の尖つた先で壁の頽れた穴を更に突き顔さうといふのであつた。

彼女は音のしないやうに少しづつ突き顔すと傷み切つてゐる古い壁の穴はだん／＼に擴がつて、櫛の先はやがて木舞の竹に觸れるやうになつた。これで此方側は大抵頽れたので、彼女は木舞の竹の間から更に向う側の壁を突き顔さうとすると、櫛の先が思はず強く當つたのであらう、向う側の壁は案外に脆く頽れて、大きい土が剥れるやうにばら／＼と落ちた。お末ははつとして手を凍めると、その頽れた穴は急に眼を明いたやうに灯の影を明るく洩した。

隣でもこの音に氣が注いたらしく、若い女の囁く聲が又聞えた。

「あれ、どうしたんでせう。壁が急にあんなに毀れて……鼠でせうか。」

お末はその穴から次の間を覗くと、聲の主は丁度此方に向いてゐたので、眼と眼はすぐに出逢つた。竈下地のやうな髪に結つた若い女は確實にお房に相違なかつたお房のそばには薄い蒲團を敷いて、一人の若い男が横になつてゐた。その枕もとには薄暗い行燈が點つてゐた。

「お嬢さま。」と、お末は壁の穴から低聲で呼んだ。

お房は不安らしい眼をして此方を見つめてゐるばかりで、すぐには返事をしさうもないのでお末は焦れて又呼んだ。

「お嬢さま。お房様。末でござります。」

「え。」と、お房は片膝を立てたが、まだ直には此方へ寄つて來なかつた。

「お房さま。末をお忘れでござりますか。わたくしでござります。」

「末……。まあ。」

お房はやう／＼起き上つて、壁の頽れから覗いた。

「お嬢さま。お懐しうございました。末はどんなに苦勞して、あなた方のおゆくへを尋ねてゐたか判りません。よくまあ御無事でゐて下さいました。」

云ふ人の顔は見ないが、その聲が涙に顫へてゐるのはお房にも能く聴取られた。

「まあ。お前、どうしてこゝへ……。」と、お房も涙ぐんだ。「何しろ此方へ廻つて來ることは出來ないの。」

「斯うしてお話をするより他に致方はござりません。わたくしはこの暗い部屋へ押籠められてゐるのでござります。」

「どうして押籠められたの。」

「お嬢さまを拐引したお吉といふ女にだまされたのでございます。」

今夜の始末を口早に話すと、お房は美しい眉を寄せて聴いてゐた。

「まあ、可哀さうに……。どうかして早く出して遣りたいが……。表の錠は妾には外れないか知ら。」

引返して縁側へ竊と出て行かうとするお房を呼び止めて、寢てゐる男は何事かを囁いた。男は二人の談話を寢ながら聴いてゐたらしい。その入智慧を受取つて、お房は壁の顔れ穴へ又戻つて來た。

「末、その部屋は今までも色々の人を押籠めて、中には殺して床下へ埋めてしまつたのもあるさうだから、床の板は譯なく明けられるやうになつてゐるらしい。何とかして疊をあげて床板を剥つて、縁の下から這ひ出る工夫は無いかしら。」と、彼女は低聲で教へた。

「では、兎も角も遣つて見ませう。」

お末も今までに其の智慧がなかつたのである。彼女はすぐに壁から離れて、両手の生爪が剥れさうな思ひをして何うにか斯うにか、一枚の疊をあげた。つゞいて二枚三枚とあげた。それから探りながらに床の板を剥ると、果してそれは案外に手輕く外れたので、彼女は汗を拭く間も無しに床の下に潜り込んだ。お房が氣を利かし

て縁側の障子を細目にあけて置いてくれたので、そこから洩れる灯の光が庭に落ちて、暗い床下に這ひ廻つてゐるお末にも庭へ出る方角がすぐに判つた。彼女は蜘蛛の巣を頭に冠りながら縁先へやう／＼に這ひ出した。

「誰かに見られると不可ないから早く……。」と、お房は彼女の手を取つて自分の部屋へ引入れて障子を窃と閉めてしまつた。

「お嬢さま。」

懐しさが胸一杯になつて、お末はそこに泣き倒れた。聲を立てまいと思つても、泣く音は彼女の嘯みしめてゐる浴衣の袖から洩れた。お房も彼女に取付いて泣いた。

「御道理ですが、あんまり大きい聲をしちやあ不可ません。」

寝てゐる男は起き直つた。それは彼の輕業師の倅といふ藤太郎であつた。紀州で逢つた時はまだ前髪であつた彼がもう立派な男に成つてゐたが、お末はその顔をよ

く見覺えてゐた。

「私は此間、舞臺の上で綱から落ちて、この通り左の足を挫いてしまつたので、この屋敷にあづけられて療治をしてゐるんです。」と、藤太郎は傷いた足を抱へながら云つた。「そこで段々様子を見ると、こゝの屋敷は悪者の寄り集るところで、なかなか油断は出来ない。私も怪我が癒つたらお房さんと一緒に逃げ出さうと、内々相談をしてゐたんです。お前さんが來たのは丁度幸ひだから、二人を連れて早くお逃げなさい。お傻さんは彼方の座敷で主人の酌をしてゐるやうだから、姉さんに頼んで窃と呼び出して來てお貰ひなさい。」

「では、妹御様もこの屋敷にゐらつしやるんですね。」と、お末は訊いた。

「妹もこゝにゐます。」と、お房はうなづいた。

「それでは妹を窃とこゝへ呼んで來てから、妹だけを連れて逃げてください。」

「さうして、あなたは……。」と、お末は又訊いた。

「妾は……。妾は藤さんの怪我の癒るまでこゝにゐます。」

「不可ない、不可ない。」と、藤太郎は小聲で叱るやうに云つた。「こゝに何日までもぐづぐづしてゐると取返しとりかへの付かないことになる。私は何うなつても構はないから早くこゝを逃げてくれ。いや、その方が二人の爲だ。早く逃げてくれ。」

「でも、妾は……。」と、お房はまだ躊躇してゐた。

お房と藤太郎とこの二人の間に何ういふ糸が繋がれてゐるか、お末はそれを詮議する暇がなかつた。彼女は氣を燥りながら藤太郎に訊いた。

「お前さんは些ちよつとも歩けないんですか。手をひかれても歩けないんですか。」

「跛足を引いて無理に歩けないこともありませんが、そんな足手纏ひを連れ出さうとすると、お前さんまでが逃げ損そんじる。私を置去りにして早くお出でなさい。」

見るとお房は泣いてゐる。この場合、お末は何うして可わか分わらなかつたが、兎も角もお俊にも早く逢ひたいので、彼女はお房を催促して、妹をこゝへ呼び出して

くれと云つた。お房は承知して出て行つたあとで、お末は重ねて訊いた。

「あのお吉といふ人は何うして此屋敷を識しつてゐるんです。」

「こゝの主人は樺島來助と云つて、置いてけ堀ほりでも名代の悪旗本で、悪い奴等が江戸へ出て来てその隠れ場所に困ると、皆なこゝへ駆込んで来るから、色々の奴が出で這入はいりをしてゐます。お吉といふのは私の繼母です。親父も以前は正直な興行師こうぎやうしだつたんですが、繼母のお吉が来てから段々と悪い方に染まつてしまつて、この屋敷やしきなんぞへ出這入するやうになつたんです。紀州でお前さん達に逢つた時も、親父は正直な料見で世話をする積りだつたのですが、途中から阿母おふくろが悪い智恵をつけて、到頭お嬢さま二人を拐引かきひかして行つて、無理に一座の藝人げいじんにしてしまひました。あんまりお氣きの毒どくですから、それからそれへと諸國しよこくを渡り歩く間も、私が陰かげになり陽ひなたになつて姉妹の世話をしてゐる中に……。」

云ひかけて彼は口を噤つぶんだ。先刻からの様子ようすと今の談話はなしとで、お房と藤太郎との

関係もお末に大抵推量された。然う判つた以上、彼女はいよく藤太郎を置去りにして行く譯には行かなくなつた。どうして此の怪我人を連出さうかと彼女はその處置に迷つてゐるところへ、お房は妹を連れて來た。

無事なお俊の顔を見せられて、お末の眼には新しい涙が湧いた。

(11)

自分を置去りにしても、お房とお俊とを早く連出して貰ひたいといふ理由を藤太郎は詳しく説明した。父の重藏と繼母のお吉が此屋敷に出入してゐる關係から、舞臺で怪我をした藤太郎もこゝへ連込まれて養生することになつたので兩國の小屋が閉るとお房とお俊は毎晩看病に來た。その美しい二人に主人の來助が眼をつけて怪我人の看病は其方退けにして無理無體に自分の居間へ呼び付けて、酒の酌をしろ

と強ひた。そればかりでなく、姉妹のお房にむかつては猥がましいことを云ふ、それを他ながら見聞してゐる藤太郎は氣が氣でないので、寧ろ看病に來るなと姉妹に云ひ聞かせてゐるが、何分にも藤太郎の容態が氣にかゝるので、姉妹は忌な思ひを忍んで毎晩見舞に來る。さうして、主人に捉つて酌を強ひられる。その中には何んな残酷な目に逢はないとも限らないので、藤太郎は競々してゐる。こんな事情が、潜んでゐるのであるから、お末が偶然こゝへ來合はせたのを幸ひに藤太郎は姉妹の娘を彼女に渡して、危険の地位から逃れさせやうと云ふのであつた。

「さう云ふ譯ですから。ぐづぐづしてゐて見付けられると大變です。私に構はず二人を連れて早く逃げてください。」と、藤太郎は繰返して云つた。

斯うなると既う猶豫は出來ないので、あとに残つた藤太郎の身の上を氣配ひながらも、お末はお嬢様二人を連れ出すことに決心した。お房は泣いて溢つてゐるのを藤太郎は叱つた。お末も宥めながら無理に部屋の外へ引出した。

家の中からは到底出られないので、三人はすぐに庭に降りた。植込の間をくゞつて表門の方へぬけ出さうとするのであつた。藤太郎は縁側まで這ひ出して来て、お房に云つた。

「これぎりでも、お前をこの主人に奪られるよりは遙に優だ。私は安心して死ぬる。」

お房は引返して又泣いた。それでは際限がないので、お末は涙を呑み込んで彼女を再び引摺つてゆくと、荒れ果てた廣い庭の木立の間に、一つの螢が三人を導くやうに飛んで行つた。

「あれ、御覽なさいまし。阿母様の魂が皆さんを導いて下さるのでござります。」と、お末は囁いた。

實際、その螢は母の亡魂であるかのやうに、三人の行手を照して庭口から表門の方へ導いて行つた。さうして、どこへか消えてゆく螢の影を、お末は見送つて、手

をあはせた。不取締の屋敷だけに、門番は宵から寝てぐも了つたのであらう、門の潜りは先刻のまゝに明けてあつたので、三人は安々と門の外へぬけ出して、初めてほつと呼吸をついた。

それでも藤太郎のことが氣にかゝるのであらう、お房は黙つて俯向いて歩いた。お俊は早く阿父様に逢はせてくれと云つた。

「勿論のことです。兎も角もこれから眞直に深川へまゐりませう。」

お末は先へ立つて暗い川端を急いで行きかけると、向うから一人の男が来た。彼は旅捲へをして小田原提灯を持つてゐた。

「あゝ姉さん。」

「はう。」

惘然としながらお末は立停ると、男の旅人はそばへ寄つて来た。

「こゝらに樺島様といふ御屋敷はありませんかね。」

訊かれてお末は又愕然とした。彼女は姉妹の娘をうしろに圍ひながら、提灯の光にその男の顔を透して視ると、彼はゆうべ長門屋の店へ匕首を買ひに来た熊吉であつた。こゝで再びめぐり逢つたのは幸ひであつたが、この場合は彼女は何うすることも出来ないで、残念ながら素知らぬ顔をして別れるより他はなかつた。お末は暗い方へ顔を背けながら答へた。

「存じません。この御近所の者でございせんから。」

云ひ捨て、足早に摺違つて行かうとすると、熊吉は意地悪く提灯を差付けて、仔細ありげに此の三人連を照して見た。

「お前さん達は何處へ行きなさる。」

樺島の屋敷をぬけ出して来た三人の女は、揃ひも揃つて跣足であつた。夏とは云つても夜はだん／＼に更けて来るのに、若い女達が皆な跣足で歩いてゐる。彼が不審の眼をそゞぐのも無理はなかつた。その胡亂な足下をぢろ／＼見られて、お末は

いよ／＼薄氣味が悪くなつた。

「いゝえ、あの、八幡様へ夜詣に……。」

「深川の八幡様へ跣足まゐりか。そりやあ御信心だね。」と、熊吉はまだ不得心らしい眼を光らせて、三人の様子をぢろ／＼見つめてゐた。

「急ぎますから御めん下さい。」

好加減に外して行かうとするお末を、熊吉はまた呼び戻した。

「おい、おい、姉さん、夜まゐりと云ひなさるが、お前達の様子が何うも腑に落ちねえ。それに其方にゐる若い姉さん達は何う見ても素人ぢやあねえ。お前達は兩國の小屋に出てゐるんぢやねえか。どうも見たことがあるやうだ。」

お末はいよ／＼返事に困つた。彼女、お房とお俊に合圖をして、急いでこゝを通り抜けようとする、熊吉は執念ぶかく追つて来た。

「おい、逃げちやあ不可ねえ。二人が揃つてそんな姿で夜道をするには何か譯があ

るに相違ねえ。譯を聞いた上で、おれが相談に乗つて遣らうぢやねえか。え、どういふ譯で何處へ行くんだ。正直に話すが可い。」

「いゝえ、ほかに譯は何にもありません。全く信心で夜まゐりに行くんでございます。」と、お末は強情に云つた。

「さうか。そりやあ嘘ぢやあるめえが、俺にはまだ少し判らねえことがある。」と、熊吉は冷笑つた。「それぢやお氣の毒だが、俺と一緒にちよいと其處まで来てくんねえか。」

「どこへ行くんでございます。」

「駒止橋のそばに輕業師の宿がある。そこまで一緒に来て呉んねえ。」

「急ぎますからそんな所へは参られませんか。」

「さうだらう。行かれめえ。行かれねえ筈だ。駒止橋へ行かれなければ俺の行くところへ一緒に來い。」と、熊吉の聲は急に暴くなつた。

三人の女を駈落者と見て、嚇して再び拐引してゆく積りであらう。もう柔順には逃すまいと覺悟を定めて、お末は彼の方へ向き直つた。

「折角ですがお前さんと一緒にには行かれませんが兵庫で一度拐引されて、江戸でまた拐引されて堪るもんですか。よく妾たちの顔を御覽なさい。」

彼女は提灯の光の前に恐れ氣もなく其顔を突き付けて見せた。熊吉は不思議さうにぢつと眺めてゐたが、やがて思ひ出したやうに叫んだ。

「むゝ、さうか。今初めて思ひ出した。お前たちは丸龜の浪人者の路連か。どうして江戸へ來てゐるんだ。」

「お前はゆうべ横山町の長門屋へ匕首を買ひに行つて斷られたでせう。」
「どうして知つてゐる。」と、熊吉も流石に驚いたやうに云つた。

「お前のやうな海賊がこゝらに彷徨いてゐることがお上の耳に入つて、もうお手が廻つてゐるのを知らないか。」と、お末は逆捻に嚇すやうに云つた。

嚇されて熊吉も稍怯んだ。脛に疵持つ彼はもうお末を相手にしてはゐられなくなつた。もう一つには、多寡が若い女と侮つてゐたお末から案外に逆捻の勇氣を見せてられて、少し氣を吞まれた形にもなつたので、彼は黙つて突つ立つてゐた。その弱味に付込んで、お末は矢庭に彼の袂を掴んだ。さうして大きい聲に嘯鳴つた。

「皆さん。早く来てください。泥坊でございます。大泥坊がこゝに居ります。」

嘯鳴られて、熊吉はいよゝゝ狼狽へた。彼はあわてゝ提灯を吹き消して、片手でお末の横鬢を強く撲つた。撲られても彼女は容易に掴んだ拳を弛めないうで、幾たびか續けて叫んだ。お房もお俊も一緒に叫んだ。

「泥坊……泥坊……早く来てください。」

女とは云ひながら必死の力で獅噛付いてゐるので、熊吉はお末一人を何うすることも出来なかつたが、斯くしてゐる中には誰か加勢に來はしないかと恐れられて、

彼も既う一生懸命であつた。彼はお末の頭鬢を引掴んで力任せに捻伏せようとする。お俊は路端に落ちてゐる小石を拾つて、彼の顔のあたりへ暗探りに叩き付けた。眼潰しを食つて彼はいよゝゝ慌てた。

「泥坊……泥坊……」と、お房は又叫んだ。

若い女の甲走つた聲は川の水にひびいて遠く聞えた。その聲を聞付けて一人の男が河岸傳ひに駆けて來た。男は彼の岡つ引の幸次であつた。

熊吉の運命はもう説明するまでもあるまい。

お末は一夜の中に主人の娘二人を救ひ、併せて其仇を捕へたのである。この物語はもうこれで盡きてゐる。併し讀者を満足させるために、この物語にあらはれた重なる關係者の結果を報告するのも筆者の義務であらう。

重藏が先づ捕はれ、熊吉がつゞいて捕はれた以上、お吉も無事に逃げ負せる筈が

ない。彼女も置いてけ堀の屋敷から歸るところを押へられた。吟味の末に海賊の熊吉は死罪の上に獄門に梟けられた。重藏は牢死した。お吉は遠島に處せられた。

藤太郎は何うしたか判らない。恐らく樺島來助に殺されたのであらうと云ふ噂であつた。樺島はその後にも不行跡が重つて、二年の後に家改易、本人は切腹申付けられた。

父にめぐり逢つたお房とお俊との歡喜は云ふまでもない。併し歡喜の中にも悲哀はあつた。お房は髪を切つて尼となつた。

お末は長門屋の親戚から懇望されて下谷御成道の刀屋上總屋の嫁になつた。新九郎は深川の寺を出て、お俊と一緒に世帯を持つた。その費用萬端は上總屋から出してくれた。

紀州の七兵衛は何うなつたか。何分にも遠國で、加之も他領のことであるから、江戸まで其噂は傳はらなかつた。(をばり)

大正八年四月十五日印刷
大正八年四月廿六日發行

うす雪奥附

定價金壹圓拾錢

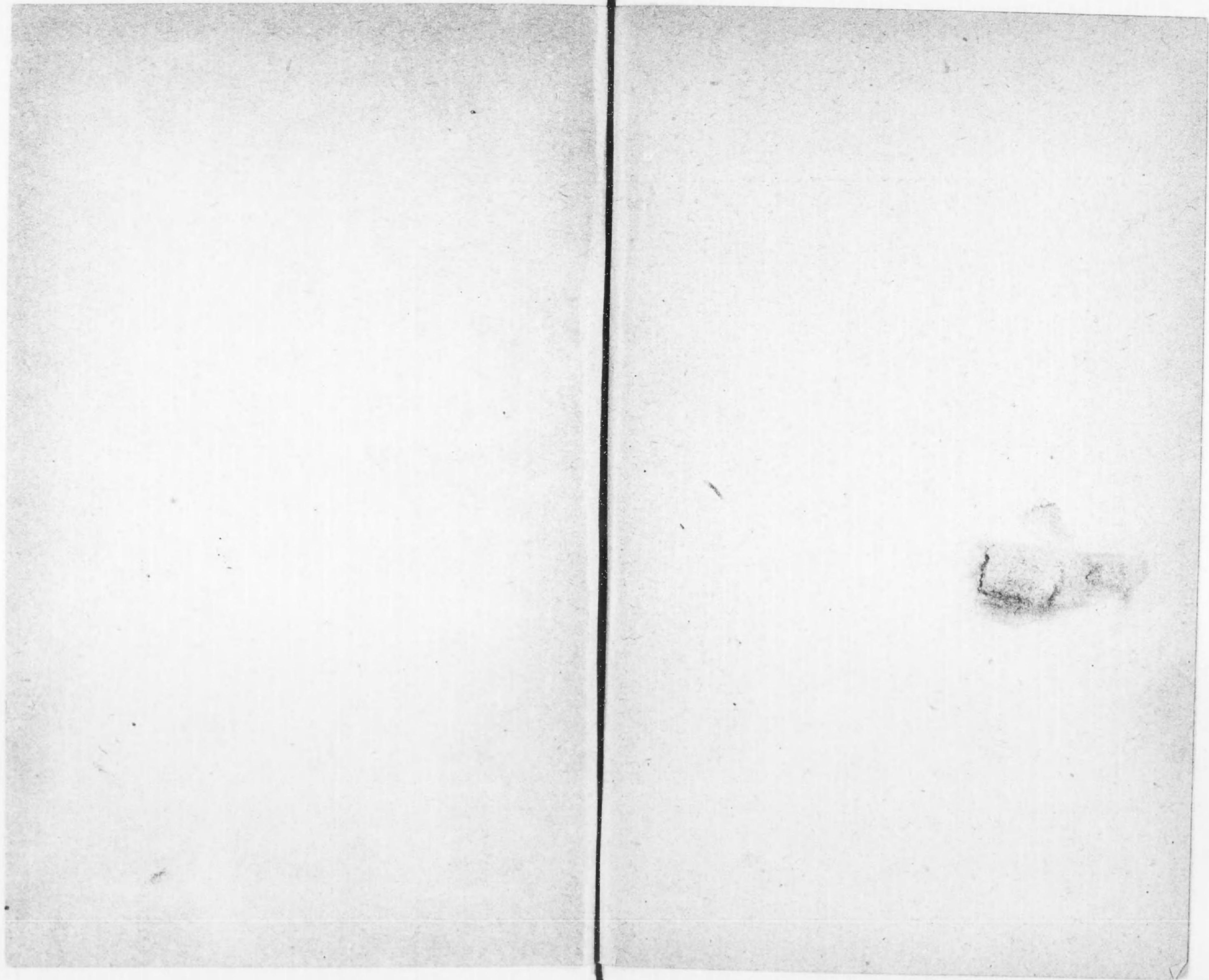
著作權所有

著者	岡本綺堂
發行者	遠藤孝篤
印刷人	牛坂三郎
印刷所	邦文社

發行所

東京市牛込區神樂町
振替東京四四六八七

文泉堂



281
12/5

終

